



「トビタテ! 留学JAPAN」日本代表1期生 ラオス初となる「かけ算九九のうた」を制作

留学体験レポート

高木 一樹さん

国際地域学部 国際地域学科
地域総合専攻(イブニングコース)2年

未来のことはわからない チャレンジし続けることが大事

私が文部科学省の官民協働海外留学支援制度「トビタテ! 留学 JAPAN 日本代表プログラム」に応募し、ラオスで活動することになったきっかけのひとつは、大学1年次に調査に同行したフィリピンでの体験です。大学へ入る前にひきこもりを経験し、また当時は英語もできなかったため、コミュニケーションが苦手でしたが、現地の人は温かく接してくれました。彼らと暮らし、調査を行ううちに、人と接することが楽しいと感じる、以前と違う自分に気づいたのです。「自分が変わったので、次は現地の人にも影響を与えられる活動をしたい」。そう考え「トビタテ! 留学 JAPAN」に応募しました。

当初は教育分野の課題解決に向けて教員養成学校で映像授業を展開する予定でしたが、4カ月間試行錯誤しても許可が下りず、このプランは頓挫。そこからラオスの初等教育の現状を再調査しました。そこで自分と同世代でもかけ算が完璧にはできない人があると知り、授業対象を小学校に変更し、特に算数能力の向上を目標に据えました。その具体策がラオス初の「かけ算九九のうた」です。

ダンスと歌詞を小学校の先生に、CD デザインを寺院のお坊さんになど、すべて現地の人に協力を依頼。小学校1年生の授業で15日間、ダンスをしながら歌ってもらいと、九九のテストの平均点が49点から94点まで上がり、9割の児童が満点をとれるまでに

なりました。

その後、各地から「授業で使いたい!」という依頼が舞い込み、帰国するまでに838名もの小学校教員に使い方を教えました。「かけ算九九のうた」はインターネット上でも見られるため、私が帰国した今もラオスで広がり続けています。

これからは地域社会に貢献する方策や人の心を前向きに変える方法を学びたいです。この留学は自分の世界を一気に広げ、本当にやりたいと思える目標と引き合わせてくれました。今後もラオスを訪れ、大学での学びを生かして新しいプロジェクトを展開していくつもりです。

「未来のことはわからない。だからこそチャレンジを続けることが大事」と語る高木さん。挫折することもあるけれど、動き続けていればきっと出会いや転機が訪れる——。ラオスでの留学体験は高木さんをより前向きに変え、わからないことを知りたいという欲求や、一步踏み出そうとする姿勢をもたらした。



1 教員養成学校で小学校の先生向けに授業を行った様子。2 ラオスの児童と現地パートナー。



たかぎ・かずき
1993年生まれ、群馬県出身。2013年に東洋大学に入学。14年に文部科学省 官民協働海外留学支援制度「トビタテ! 留学 JAPAN」1期生の選考を通過し、ラオスへ。現地で制作した「かけ算九九のうた」は最優秀賞に次ぐ優秀賞とアンバサダー特別賞のダブル受賞で文部科学大臣から表彰される。15年に帰国し、現在も学業と並行して、途上国の教育課題を若者の力で解決することを目指すNPO法人「e-Education」のラオス担当として活動を継続。

第1回東洋グローバルリーダー(TGL)キャンプ開催

2016年2月12日、東洋グローバルリーダーキャンプが開催され、76名の学生が参加。学生が留学など海外への渡航に備え、世界の各国について調査を行いました。学生たちは3~5人のグループに分かれ、担当する国を決め、さまざまな方法でリサーチ。最後に集めた情報をポスターにまとめ、ポスターセッションで参加学生や教員に向けて発表しました。学生たちはこの活動を通じ、事前調査を行い、具体的な目的意識をもって海外渡航することの大切さを学びました。



1 学部の違う学生同士、協力して調査・ポスター制作。2 教員もポスターセッションに参加。最後に1人1票ずつ投票し、チーム「Mekishiko-!!」が1位に輝いた。